

2013.3.10 辺見 俊一さん

「仮設住宅に住んで」

■あの忌まわしい震災から2年になります

あの日、大きな地震の後「津波が・・・？」と思いましたが、過去のチリ津波、三陸沖地震津波の2回共大した被害がなかったのが、今回も大したことがないと高を括っていました。その時、前の家の方が「テレビのテロップで6m以上の津波が来ると流れた」と言って、荷物を持って車で逃げるところでした。

それでは我々も一先ず逃げようと、妻と犬を

車に乗せ山の方へと車を走らせました。すぐに帰れると思いきや着のみ着のまま、何も持たずに逃げました。途中で後ろを見たら、海岸の方から黒い濁流が押し寄せてくる。もう無我夢中で更に山の方へと逃げて難を逃れました。全てを失いましたが、幸い家族全員無事避難をし、命だけは助かりました。

■仮設住宅に住んで

震災の3ヶ月後の6月1日、仮設住宅の抽選会で渡波仮設住宅第一団地が当たり、1年6ヶ月住まわせてもらいました。第一団地は19棟あり、1棟の部屋割りは1区画（4畳半が2部屋、台所、風呂、トイレ）これが5ブロックあり1人～3人家族は1区画、4人以上は2区画を割り当てられ、79世帯218名が居住しています。一口に仮設住宅と言っても建築メーカーによってピンからキリまであり、出来上がりには雲泥の差があります。当団地は中程度で比較的良好な方でしょう。ここに、北上川の東側の住民（湊地区・渡波地区・半島地区）の方々が入居しました。

震災前は、あまり面識や交流のなかった人々の集まりでしたが、同じ思いで難を逃れて来た方々ですので、比較的和気藹々と暮らしてきま

した。多少のトラブルもありましたが、皆様方の温かいご支援と励ましの言葉に助けられ、みんな元気に過ごしてきました。

みんなの思いは同じで、1日でも早く仮設を出て自立の道を進もうと頑張っておりますが、現実はまだなかなか厳しいものがあります。それでも、私がいる間に10世帯ほど自宅を修理したり、市内や他の市町村に家を求めて、自立の道を歩み始めている方もおりました。現在もボツボツ出て行っているようですが、逆に入ってくる方もいるようです。

仮設住宅に住んで春夏秋冬を過ごしてきました。入居当初ほどの家も蟻の大群にたいへん苦勞しました。部屋の中の蟻の行列掃除に大奮闘しました。

出入り口の戸を開ければ直ぐ外です。春・秋

はさほど問題ありませんでしたが、夏は部屋に窓が一つ、出入り口が一つで風通しが悪く、暑さに参りました。

逆に冬は、寒い風がもろに部屋に入り、大変な寒さです。さらに縁の下がガラ空きなので、床下からの寒さが並大抵ではありません。また、

水道管がムキ出しの状態です。縁の下に配管されているため、仮設内のあちこちで水道が凍結して使用できません。水の出るお宅から貰い水をして、何とか凌いでおりました。

さらには、暖房器具やお風呂の湯気で天井にカビが発生し、悩まされました。

■行政への提案

これらの対策を市の方をお願いしたら、「それは県の仕事だ」と言われ、言い争いもしました。行政のあり方を嫌というほど見せつけられました。

吟味をして建てた家でさえ、不便な箇所は沢山出てくるものです。仮設だからある程度の我慢はしなければならぬと思ひ、少々の事は我慢してきました。

そこで、行政の方々にはお願いしたいことが

あります。過去に阪神淡路の大震災、新潟中越の地震などで数多くの仮設住宅を建ててきていることと思います。また災害はこれからも必ずあり得る事と思ひます。その地方に適した建築規格をきめ、各プレハブメーカー、建設メーカーが全て同一の建築規格で行うようにしたら如何かと思ひます。追加工事は結局、高上りになりますから。

